

『人文ムセイオン2024』実施報告

竹中 幸史

(人文ムセイオン2024 コーディネーター)

人文ムセイオンとは

人文学部の「人文コア科目」の1つ、人文ムセイオンは今年、第2回を迎えた。第1回（人文ムセイオン2023）の様子については詳細かつ熱のこもった報告¹があるので、そちらに譲り、初めて知る読者のため本授業の概要をものしておこう。

人文ムセイオンとは、設定された共通テーマに即して人文学部の4人の教員がそれぞれの専門的見地から報告を行い、その後、参加者との質疑応答を行う、シンポジウム形式の授業である。そもそもこの授業は、人文学部生に「人文学の神髄」を伝える、あるいはどの学生にも「人文学部でこれだけは学んだ」という経験を得てもらおう試みとして始まった。しかし教員の負担にならないように、むしろ教員が積極的に参加したくなる企画、研究の動機づけを兼ねたものとして設計されている。さらにこの授業は一般にも開放して、地域に山口大学人文学部における学びの機会を提供する。日程は、10月末の土曜日、ホームカミングデーに設定されているが、これは、久しぶりに母校を訪れた卒業生にあらためて学問の魅力に触れてほしいという願いも込められている。かように、この授業は一石で4羽の鳥を落とそうという企画なのである。

シンポジウム形式の授業となれば、学部生にはいささか荷が重いのではという懸念のため、事前に受講生には修学支援システムを通じて各報告を理解するための資料が配布されている（授業4回分）。これに当日の聴講（4回）を併せ、受講生は計8回の授業を受けたとみなされて1単位を認定される。昨年の「人文ムセイオン2023」には320名ほどの参加者があり、教職員一同驚いたが、さらに報告後になされたディカッション（1時間×2回）においては学生からの質問が全く途切れず、彼らの学問への熱意を誰もが感じるようになった。想像以上の手ごたえを得て、今年度を迎えたのである。

マイナーチェンジ

人文ムセイオン2024開講にあたっては、授業登録ならびに形式にいくつかのマイナーチェンジが施された。第一に学生による履修を2度までと定めた。これは4年間で4単位をとることができるのはやや多いのではないかという声に応えたため、そして教室の収容力のためである。山口大学最大の教室は430名が入れる共通教育棟1番教室だが、仮に1学年につき100名強が参加した場合、教室の収容人数を超えてしまう。そこで何度でも参加可能だが、単位が認定されるのは2度までとしたのである。第二に今年度は理学部教員2名をコメンテーターとして招待し、ディスカッションに加わってもらうことにした。これは学内外で求められている文理融合の試みとしても評価できよう。また当日は報告が終わるたびに20分の休憩に入るが、この間に受講生は修学支援システムを通じて、感想と質問のいずれか1つ以上を入力することになっている。昨年は学外者のみ紙媒体でこれらを提出してもらっていたが、今年度は高橋先生（社会学）のご協力を得て、外部者用のアンケート記入アプリを用いて集計することが可能となった。

2024年3月、竹中の提案で今年度の共通テーマは「人文学の音／おと」に決まった。報告を脇條（西洋哲学）、小林（文化人類学）、森野（日本文学）、太田（言語学・英語学）各先生に依頼したところ、

どなたにも快諾していただいた。次いで5月には理学部からのコメンテーターが廣澤（数理学部）、末竹（情報科学）両先生に決まった。「私が何をコメントできるか」と苦笑いのお二人であったが、そのお人柄はかねて承知していた。必ず良いものになるという確信は、この時すでにあったのである。

広報活動

人文ムセイオンを意義あるものにするのは、報告者である教員の本気度と、学生の意欲である。それゆえ4月の1年生オリエンテーション、2年生オリエンテーションにおいて、竹中が概要を説明した。入学したての1年生には「集中講義」という表現でさえ新鮮なのに、一般開放型シンポジウムだの、学会報告スタイルだの、人文学の神髄だのは、実に眩しく見えただろう。彼らの目が一気に輝くのがわかった。

7月には、1年生向けの授業「基礎セミナー」の最終回（速水学部長担当）において、コーディネーターと発表者4名が登壇し、それぞれの専門とおよその報告内容を伝えた。入学後3か月たって大学に良くも悪くも「慣れ」てきた彼らに学問への動機を思い起こしてもらういい機会になった。この時森野は、本番で扱う基礎概念、「サウンドスケープ」の説明を芭蕉の句を例に説明した。1年生には既に講義が始まっていたといえよう。

夏休み明けの1、2年生オリエンテーションで3度目の説明を行ったが、3、4年生向けにはそうした機会がないため、彼らには人文学部内の掲示板にポスターを用いて告知した。徐々に期待を高めるため、5月以降、報告者4名のテーマに沿った4枚のポスター（古代ギリシアの女神（ムーサ）の1人クリオ、鶯、中国客家の住居、そして猿人から新人への人類の進化を表すイラスト）を作成し、月毎に1枚ずつ学部内に掲示することにした。10月1日以降はクリオをあしらったA1サイズのポスターを人文学部研究棟のエレベータ前と集中講義用の掲示板に貼り出した。一般には人文学部ホームページのほか、『サンデー山口』に開催情報を載せ周知を図るほか、入試課の協力を得て、県内の公立高校進路指導部にメールを送付した。また協條はラジオ番組に出演した際、その話の多くをムセイオンに割ってくれた。

いったいどれほどの学生が受講してくれるか。昨年度と同程度の300名は来ると思っていたが、9月末以降、受講登録は毎日数十名単位で増え続けた。最終的に正規登録学生は395名、当日の参加者は学外者を含め430名。会場は文字通り満席となったのである。

目に見えないものを捉える

当日のスケジュールは以下の通りである。若干の超過はあったとはいえ、およそこの通りに進んだ。報告要旨は末尾にあるので、参照されたい。

開会の辞

第1報告（8:55-9:35） 協條担当

コメント書き込み・休憩（9:35-9:55）

第2報告（9:55-10:35） 小林担当

コメント書き込み・休憩（10:35-10:55）

コメンテーター2名からコメント（10:55-11:05）

報告者リプライ＋フロアとの質疑応答（11:05-12:00）

（昼休み）

第3報告（13:00-13:40） 森野担当

コメント書き込み・休憩 (13:40-14:00)
 第4報告 (14:00-14:40) 太田担当
 コメント書き込み・休憩 (14:40-15:00)
 コメンテーター2名からコメント (15:00-15:10)
 報告者リプライ+フロアとの質疑応答 (15:10-16:00)
 総括 (報告者・司会) (16:00-16:10)
 アンケート記入 (16:10-16:20)
 閉会の辞

昨年と同様、午前と午後2名の報告があるが、昨年との違いは第2報告と第4報告の後に、理学部から招いた教員2名のコメントがあり、報告者のリプライがあってから、質疑応答に入ることである。この試みが吉と出るか凶と出るか、それはふたを開けてみなければわからない。

第1報告は協條が担当した。前学部長の協條はこの人文ムセイオンの発案者であり、またネーミングも彼による。古代ギリシアの学問・芸術の女神が集う場がムセイオンであるが、異分野の教員が語り合うこの授業のスタイルを思えば、絶妙の名づけであったといえようか。

協條は事前に資料を2つ、そしてyoutubeのリンクを2つ示して、古代ギリシアの音階について事前に知識を得てくるように伝えていた²。楽器の演奏と歌唱を差し込みながら、協條は2000年以上前の、さらには今や日常から失われてしまった「かつて何より美しいとされたコード」を復元してゆく。21世紀に生きる私たちには複数のコードにさほどの差異があるようには思えないが、古代ギリシアの人びとには全く違うものに聞こえていたはずである。失われたのは「音」ではなくて、音の聞こえ方、解釈の規範、音をめぐる旧き感性である。のっけから学生たちは圧倒され、中には「音速で取り残された」と感想を述べる者もいた。確かに音という「見えない存在」を通した世界観を、音楽また数学の知識を何ら持たない学生が理解するのは少々難しかったかもしれない。

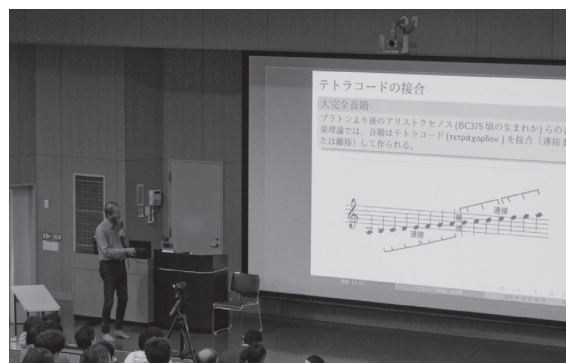


図1 協條の講義

第2報告は、小林の担当である。文化人類学を専門とする小林は中国少数民族の1つである客家、とくにその居住スペースである土樓の研究を行ってきたが、その研究と音楽はどのようにかみ合うのか。彼もまた事前に資料を読むよう指示していたのだが³、驚いたのは、そのうちの1つがマックス・ウェーバーの手になるものであったことである。一般にウェーバーといえば宗教社会学、経済学あるいは政治思想の分野で取り上げられる人物だが、音楽理論にも造詣が深いとは筆者は寡聞にして知らなかった。汗顔の至りである。ここで小林は協條と同様、音楽理論を数学の知識を交えながら、説い

てゆく。報告は終盤、中国における平均律の説明に至り、客家の円形の土楼に及んだ。およそプライベートを感じさせないその居住形態は、そこが1つの小宇宙であり、世界が円環的に完結していることを示している。これも音楽と世界のリンク、あるいは居住空間というマイクロコスモスと、音楽秩序というマクロコスモスが対応していることを暗示しているのではないか。私が驚きをもって顔をあげたとき、小林の報告は閉じられた。多くの論点と射程の大きさに、目の前の学生は戸惑いを見せる。昨年、ムセイオン2023を受けている上級生は驚いた表情を浮かべている。「今年のムセイオンは難しい。」しかし小林の報告はそうした戸惑いを織り込み済である。むしろ「取り残されている」「(深く学ばなければ)理解できないものがそこにある」という感覚を学生がもつことを期待し、また楽しんでいるかのように話したのである。



図2 小林の講義



図3 昼休みの演奏会

2つの報告後、ディスカッションに移ったが、これはのちにまとめて記すことにして、まずは午後の報告を聴いてみよう。

世界をどう分節するか

人文学部・理学部教員によるミニコンサートが催された昼休みを挟み、森野による第3報告が始まった。彼がその名も「鳴くよ鶯平安京」という報告で取り上げたのは、『枕草子』のサウンドスケープであった。誰もが知る作品⁴であるため、聴衆がその世界を想像することは容易いはずだ。ただ本作において清少納言は宮中では鶯の声が聞こえないが、そこを1歩出ればしきりに鳴いていると不思議なことを言う。しかし実際のところ、鶯の声を歌った平安期の和歌は少なくないはずだ。新年になれば、もうその声が待ち遠しいとまで詠まれた鳥ではないか。この問題について森野は、実際に鳴く／鳴かないという現象で捉えず、当時の宮中の人びとに絶対的な価値を有した『古今和歌集』のテキスト分析を通じて、鶯の鳴き声は現実の空間的差異(宮中一ひな)に投影されて解釈されたと指摘する。これは音の聞こえ方が単に聴覚ではなく、当時の心性⁵に応じて形成される、あるいはテキストによる平安京という空間の理解が当時の人びとにとっての鶯の声(の意味)を生成しているといえようか。これは新たな『枕草子』『古今和歌集』の読み方だけでなく、文字テキストの私たちに与える影響を示している。ここで聴衆は、誰の耳にも聞こえていたはずの鶯の声が「聞こえない」という状況にしばしば立ち止まった後、現代世界の他の事例に思いをめぐらしたことだろう。私たちは世界を「自ら」のものにするために、どのように音・音声を分節して把握しているのだろうか。私たちは今、鳥や虫の声をどう聞いているか。私たちが聞いているとと思っている音はどのように知覚されたものか。あるいは新聞や雑誌、SNSのテキストによるリードのために、聞こえない声や叫びがあるのではないかと。

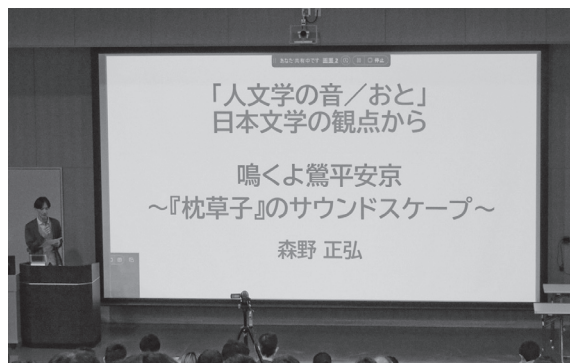


図4 森野の講義

心地よいどよめきを残しつつ、続いては言語学を専門とする太田の報告である。太田は今回のムセイオンの報告においてひとり「音（オン）」、人間の発生する音声に注目した。受講生らは事前に太田の論説を2本熟読したうえで臨んでいる⁶。それゆえ本人が恐縮するほどの—五十音から植物の発する音、旧人と新人の言語差、あるいは英語と日本語の母音と子音の数まで—多種多様なトピックを聴いても、彼らは飽きた様子を全く見せなかった。ここで太田は自身の子どもの成長を観察した実例を挙げつつ、論を組み立ててゆく。言語学という学問の間口の広さを穏やかに、しなやかに、しかし熱く語った。言語学という響きの硬質で難解なイメージをひとまずおいて、日常の言葉の使い方、単語1つに研究のヒントがあること、そうした日常の発想を大事にしつつ自らの言語観を形作ること。それは今年度で退官する太田の一貫した研究姿勢であり、学生へのメッセージでもあったのだろう。



図5 太田の講義

ディスカッション

午前と午後の報告のあとには、それぞれ1時間のディスカッションの時間が取られた。理学部の教員2名のコメントとそれに関する報告者からのリプライを経て、全体の質疑応答へと移ったのだが、理系研究者からコメントをいただくうえで「人文学の音／おと」という共通テーマは適したものであった。言うまでもなく、音や音楽は自然科学、数学との親和性が認めやすいテーマだったからである。

2人のコメンテーターは予想に違わず、自身の専門的見地から、人文学的発想の盲点を突くような鋭い批判を加えられた。私たちが思いついたとしてもうまく言語化できない類のものである。音を研究する際に文系研究者はまず芸術として捉えるのではないかという指摘は、多くの（文系学問を学ぶ）参加者があまり意識していないものではなかろうか。しかし理系ならば、周波数1つとっても音

の数学的解析が第一に考えられて当然である。午前の2報告はまさしく音楽を数学的合理性で追求した際に見えるものがテーマとなっていたが、三角関数によって音楽を考察するなど人文学ではまずお目にかかれないであろう。

また音を「情報」として捉えるというコメントとその後のやり取りでは、音を個人情報として識別する技術はすでにいくらか実用化されているが、それでも音楽理解や創作という分野では、AIはまだ人智に及ばないということであった。しかし仮にこの分野でAIが私たちに並ぶ時が来たら、私たちの聴く／聞くという行為はどのように定義し直されるのだろうか。その時は音を発する、音を聴くという行為に聴覚が果たす役割は意外に小さく評価されるかもしれない。このことに関して小林は、音楽を耳で聴くのではなく身体で聴くという発想や、またどこで聴くかということも重要ではないかと応じていた。

この議論は、午後のディスカッションまた授業全体にもかかわる問題を提起した。再びコメンテーターから、音に関する「記憶」を情報科学で生成する可能性が述べられたからである。また人間の言語の諸特性を自身の子どもの成長から抽出・分析する姿勢、まなざしへの驚きも聞かれた。私たちが何をどう聴／聞いているか、それが1つの解釈、世界観の表れならば生成系AIが私たちの聴くように音を理解する時が来るということは、彼らが1つの世界観を持ち、「意思」を有するというのではないか。また人間言語の生成はAIによる言語習得とどう関わるのか。筆者は「音」を巡る議論を通じて、人間と機械の懸隔の意外な小ささを見せられた気がした。

こうした硬派のやり取りを経たのち、学生や一般市民からの質問へと移った。理学部の山中学部長からの質問もあり、フロアからの質問は一度も途切れなかった。とはいえ昨年と比べて学生の挙手がいささか少ないようにも思えた。430名という大人数を前にして発言する勇気が出なかったこと、午前の報告内容については数学や音楽の知識が必要であり若干難しく思われたこと、また理学部の先生がたの質問のレベルの高さに気圧されたということもあったかもしれない。これはひとえにコーディネーターの工夫不足と思われる。次年度への反省材料としたい。



図6 午前のディスカッション



図7 午後のディスカッション

セカンドステージへ

かくして人文ムセイオン2024は幕を閉じた。予想を大きく上回る参加者を得て、大盛況であったというべきだろう。それは授業終了後に行ったアンケートにも如実に表れている。受講生のほぼ全員が講義を通して得た学ぶ喜びや、向学心を刺激された様子を語っていた。

また学生の満足度は「人文学の音／おと」というテーマ設定にも左右されたかもしれない。音は目に見えないものだからこそ人の思いが仮託されやすく、解釈も多様で、人文学の様々な角度から分

析が容易である。そして音はどの世界にも遍在するがゆえに、それがどのように語られるか、何をどのように聞いているかという問題は、その時代や文化を映し出す。今年の本セオンの報告とディスカッションには、音をめぐる感性には「歴史」があることが随所に現れていた。

音や声をめぐる規則性やその美を追求するのは人間である。私たちは単に耳で音を聴いているだけではなく、身体の揺れ、匂い、温度や反響など五感を総動員して聴いているのであり、コードや音律また枕草子のサウンドスケープに見られたように、私たちの知識がその聴覚や音の意味づけに作用する。発音は言うまでもなく、私たちの「身体」そのものが音源である。こう考えてきた時、音を考える試みは私たちの身体を考えることに他ならず、しかもその身体は今や、AIとの比較のうちに、その自明性の是非を突きつけられているのである。

さて本セオン2024では主にどのような音が聞こえるか／発せられるかが論じられたが、音という記号の読解の歴史性が明らかになった今、何が聞こえるかだけでなく、何が聞こえなくなったかを考えることもまた重要である。何かが聞こえるようになるという新しい感性の獲得は、何かが聞こえなくなった、すなわちある感性の消失でもあるからである。このことは沈黙や静寂の意味を再考することにもつながるだろう。

人文本セオン委員会は、既に来年度について議論している。来年度も、人文学部教員4名、理学部コメンテーター2名の開催形式で行うことは既に確認された。理学部生の正規受講については先方で審議中である。コーディネーターは今年同様、竹中が担当するが、新たに副コーディネーターを指名し、引継ぎをスムーズに行うことも検討されている。さらに撮影した写真、録画した映像、そして寄せられた感想や質問などは著作権に配慮したうえで、人文学部のホームページで一部を公開する予定である。ご期待いただきたい。

2年かけて、人文本セオンの基礎工事はおよそ完了したと言ってよい。人文学部の名物授業というだけでなく、大学を代表する「知」の発信源、共鳴箱となる日も近い。その意味で、来年度はもう一つ上の段、本セオン・セカンドステージの幕開けになるだろう。

【人文ムセイオン2024 報告要旨】

プラトン『国家』の音階：エンハーモニック・テトラコードの美

脇條靖弘

プラトンは『国家』第三巻で理想国家の市民の教育に用いる音楽について論じている。その中で彼は当時の音階（ハルモニア）のうち、理想国家での使用を許容するものとし、しないものを区別している。彼が許容するのはドリス調とプリュギア調のみで、その他の調は拒絶される。プラトンの線引きは考察に値するが、その前にそもそもこれらの音階はどのようなものだったのか。

ギリシアの音楽理論はアリストクセノスなどによるものが残っているが、残念ながら『国家』で触れられる音階についての信憑性の高い証言はない。ただアリスティデスの貴重な叙述などから、これらの音階はエンハーモニック（四分音的）テトラコード類を用いたものであったと考えられる。音楽理論の中でもこのテトラコード類は「最も美しい」とされている。様々なテトラコードの厳密な音程はピュタゴラス派の哲学者たちの探求対象でもあった。極めて微細な音程の違いが単なる数学的興味を超えて、聴覚に捉えられる音楽体験となる可能性を探求したい。

純正律と平均律と…：複数の秩序をアナロジーとし、生けること

小林宏至

古来より多くの社会では5つの音を中心に民俗音楽が奏でられることが多かった。それはペンタトニック・スケール（ヨナ抜き）と呼ばれるもので、スコットランド民謡「蛍の光」や、日本の演歌・歌謡曲などでも親しまれている。この音階はピュタゴラス音階と同様に非常に原始的な方法でつくられる旋律（秩序）であり、A（440Hz）とE（660Hz）が精緻（2：3）に響き合う純正律的な共鳴をその背景に持つ。

だが一方で純正律的な秩序は転調や、数オクターブを使う音楽には適しておらず、より汎用性が高い音階として平均律が登場する。しかしこの平均律的秩序も、M.ウェーバーが「合理的な和声」と呼ぶように、比率として必ずしも「美しく」響き合うわけではない。先の比率は、A（440Hz）：E（659.255Hz）となる。平均律の「発明」は一般に、それが普及した西洋と思われがちだが、実は明代の儒学者、朱載堉によるものとされる。だが明王朝は平均律を採用することは「なかった」。われわれが自然界に与える秩序の在り方を、アナロジーという観点から改めて問い直していく。

鳴くよ鶯平安京：『枕草子』のサウンドスケープ

森野正弘

録音機器などの無い時代、音を記録しておくメディアは専ら文字に限られていた。例えば、平安時代のサウンドスケープ（音の風景）を再現するには文字を介するしかない。しかし、文字は時として音の代用品という実用性を振り捨て、独自の価値を主張することがある。一義的であった文字の羅列が多義的な文学テキストとしての相貌を見せ始めるのである。

今回取り上げる『枕草子』もまた、記録としての側面と文学としての側面を併せ持つ特異なテキストと言えよう。この作品は、平安時代の宮廷を生活圏とする清少納言によって書かれた。問題となるのは「鳥は」段に書かれた鶯に関する記事である。それによると、鶯は宮中の敷地内では鳴かないと言われていて、実際に清少納言も十年ほどの宮仕え中、本当に鶯の声を聞かなかったとある。更に注目されるのが、宮中から一步外に出てみると、「あやしき家」の梅の木などでは「かしがましき」までに鶯が鳴いていると書かれている点である。ここでは、鶯の〈鳴く／鳴かない〉という現象が、〈宮中／あやしき家〉という空間の差異に起因するかのよう記述されているのである。

鶯の鳴き声によって分節される平安京の空間とは、清少納言にとってどのように知覚され、理解されるものであったのか。このような問題意識のもとに、本報告では『古今集』に収められた鶯の歌を顧みつつ、鶯の鳴き声をもたらすサウンドスケープの具体化を図りたい。

人間言語の音（オン）に関する雑見・私見

太田 聡

本報告では、人間言語の音声の特徴をできるだけ幅広く様々な観点から紹介し、私見を述べていく。取り上げる主なテーマ・トピックは以下の通りである。

- ・ヒトが口から発する音にはどのような種類と分類基準があるのか。
- ・音声とその指示物との因果関係である「音象徴」という事象から、我々の言語の特徴がどのように説明できるのか・できないのか。
- ・人間言語の音は、他の動物の鳴き声や信号とは何がどのように違い、どのような特性を備えているのか。
- ・ネアンデルタール人は、脳容量は現代人と変わらないのに、その言語（音）はかなり劣っていたと推定されている。どのようにしてそういった推測ができるのか。
- ・五十音図は、なぜ「アイウエオ／アカサタナハマヤラワ」という並びになっているのか。
- ・英語と日本語は、同じだけの情報を伝えられるのに、なぜ音素（母音や子音）の数が異なるのか。

報告者は、定説的見解を提示するだけでなく、わざと反例等も挙げて、異なる可能性も示すようにする。それらをもとに、参加した各自が、千思万考して、より納得できる自身の言語観を見出す機会になれば幸いである。

¹ 協條靖弘「『人文ムセイオン2023』実施報告」『異文化研究』18巻、2024年。

² プラトン、藤沢令夫訳『国家』（『プラトン全集』11巻、岩波書店、1976年、所収）特に第三巻の10節。また山本建郎「古代ギリシアの音階構成 その一 テトラコードの分割形式」（『アリストクセノス／プトレマイオス 古代音楽論集（西洋古典叢書）』山本建郎訳、京都大学学術出版会、2008年、所収）。

³ 田中有紀『中国の音楽論と平均律 30 儒教における楽の思想』風響社、2014年。マックス・ウェーバー、安藤英治・池宮英才訳『音楽社会学（経済と社会）』創文社、1967年、3-27頁。

⁴ 森野は事前資料として講義中に用いる『枕草子』『古今集』の該当箇所をまとめたレジユメを配布したほか、その本文と現代語訳を読めるインターネットサイトを紹介していた。

⁵ リュシアン・フェーヴルはある時代の人間、あるいは様々な社会的、文化的環境の人びとに特有の知覚、言語、観念の全体を指す概念を「知的道具立てoutillage mental」と呼んだ。今日の歴史学では心性mentalitéと呼ぶことが一般的である。リュシアン・フェーヴル、高橋薫訳『ラブラーの宗教 16世紀における不信仰の問題』法政大学出版局、2003年。

⁶ 太田聡「人間言語の諸特性について（1）」『英語と英米文学』26号、1991年。同「人間言語の諸特性について（2）」『山口大学教養部紀要（人文科学篇）』26号、1992年。